

(仮称) まつど市民大学設立準備懇談会 (第1回) の概要

- 《日 時》 平成28年7月5日 (火) 14時～16時
《場 所》 松戸市役所新館5階 市民サロン
《委 員》 神山 眞理 委員、密岡 晃委員、阿部 剛委員、大塚 清一委員、恩田 忠治委員、小川 早苗委員、佐久間 浩子委員、関谷 昇委員、牧野 昌子委員、萩島 賢治委員、林 総太郎委員
《傍聴者》 0名

1 市長挨拶

2 委員自己紹介

長江委員が、都合により欠席したため、(仮称) まつど市民大学設立準備懇談会設置要綱第8条に基づき、参考人として、聖徳大学 生涯学習研究所より有川氏を招集した。

3 事務局職員紹介

4 座長の選出

(仮称) まつど市民大学設立準備懇談会設置要綱第5条第2項に基づき、互選により、関谷委員が座長に選任された。

5 議 題

(1) (仮称) まつど市民大学の目的、スケジュール

(2) 松戸市内の現状、近隣市の市民大学の現状と課題

事務局より、議題(1)及び(2)について一括して説明、報告を行った。

主な質疑内容

(委員)

(仮称) まつど市民大学の対象者を「シニア世代を中心」にしている理由は何か。

(事務局)

シニア以外の世代を除いている訳ではないが、実際に活動を行う時間帯が平日の昼間であること等から、地域の担い手はシニア世代が中心であると考えた。

(委員)

懇談会では、(仮称) まつど市民大学の方向性だけでなく、具体的な手法についても意見を出すのか。

(事務局)

本日、(仮称) まつど市民大学の大きな方向性について議論いただき、次回以降で、

「名称」や「講義内容」などの具体的な項目についても意見交換をしていただく。なお、事務局でたたき台を作成し、次回の懇談会で提示する。

(委員)

地域とつながりのある人であれば、地域に入っていくことができるが、逆に地域とつながりのない人は、受講後も地域に入っていけないと思う。その点を踏まえると受講生の集め方はどのようにするのか。

(事務局)

事務局としては、ボランティアを行いたいと思う市民に受講してもらいたいので、一般公募を考えている。地域とつながりのない人でも、市民大学を通して、地域とのつながりを構築して欲しい。

(委員)

(仮称)まつど市民大学が、従来の市民大学や生涯大学校などと重複することが、想定されるが、それらとの切り分けや棲み分けは、配慮されているのか。

(事務局)

松戸市では、類似の講座が活発に行われていることは認識したうえで、生涯学習とは切り分けたいと考えている。そのような状況である松戸市にとって、どのような(仮称)まつど市民大学が相応しいかについて、ご意見をいただきたい。

(委員)

生涯学習を担当する立場として、分野の重複は税の二重投入になりかねないことを、危惧をする。今後の募集方法にも関係してくるが、地域密着型でいくことも考えられる。生涯学習とは「切り分け」というよりも、つながりはあった方が良い。生涯学習を積んだ人たちの中から意識の高い人たちが、(仮称)まつど市民大学に進むような道筋があると良い。

(3) (仮称)まつど市民大学の方向性

主な意見

(座長)

松戸市の他の類似講座と重複しないようにするため、地域密着型の担い手という切り口、既存の講座を受けた人のステップアップとしての少し水準の高い入口、またはもっと学ぶところからのゆるやかな入口とする考え方がある。

(委員)

松戸市では、町会・自治会が15地区に分かれており、地域によって組織、活動内容に差がある。市民は同じサービスを受ける権利があることを考えると、町会・自治会の組織も含めて、活動のレベルを上げていけると良いと思う。

(座長)

市民は、町会・自治会の活動とはどういうものかを知ることができる機会はなかなか

ない。そこで、（仮称）まつど市民大学を、町会・自治会の活動を知る、学びの場としての切り口とする考え方もある。

（委員）

浦安市や柏市では、講座の中から修了生のグループを立ち上がり、協働事業として提案し、その後委託に移行した成功事例もある。市が持つ課題と向き合うようなプログラムが必要であり、団体の立ち上げ支援を行っているまつど市民活動サポートセンターとも協力して、学んだ後に地域に還元できるようにつなげてほしい。

（委員）

生涯学習においても、第2期教育振興基本計画で、地域に踏み込んだ実践型の研修が提唱されている。まして、（仮称）まつど市民大学は、座学的な教養講座ではないことを、皆に知ってもらう必要がある。

（委員）

（仮称）まつど市民大学は、課題に応じたテーマ型なのか、住んでいる地域に応じた町会・自治会型なのか、前提として議論しておかないと、根本がずれてしまう。

（委員）

松戸市は町会・自治会中心のまちづくりに取り組んでいるため、地域コミュニティ指向に資すること、趣味の延長ではなく実践志向であること、学ぶだけでなく、将来松戸市をどうしていくのかということ視野に入れ、提案できることが、（仮称）まつど市民大学には求められる。今まで取り組んできたものに上乗せするようなものは必要ないと考える。

（委員）

新しいアイデアもいいが、小さなことを集約しそれを拾い上げる、草の根的な昔の町会・自治会の役割が、大事である。受講者が、町会・自治会に加わっていくための市民大学はどうだろう。

（座長）

町会・自治会も含めて、連動させていけたらよい。市民大学で学ぶことによって、より市民が町会・自治会に入りやすくなるきっかけになると良い。

（委員）

小金で子どもが増えているのは、保育所やふれあい広場での接点を増やすなど、子ども対策をしてきたからである。子どもがそのような場に参加すると、親や祖父母も一緒に集まることになるので、地域に出ていく高齢者を増やすことにつながる。松戸市をこれからどのように変えていくかのためには、（仮称）まつど市民大学には、市民に関心のあるテーマを取り上げることも重要である。

（委員）

高齢者の実態調査から、老人クラブの会員の平均年齢は77歳である。抜けている65歳から75歳の年齢層への調査では、65歳以上で働きたい人が5割を超え

ており、その理由は、生活費を稼ぐためと、働くことが元気でいる自分の居場所になるからである。

(委員)

20年間、介護、福祉の分野で活動してきたが、今日の委員の話聞いて勉強になった。(仮称)まつど市民大学は、松戸にこのような活動や団体があるということを知らせる場として、そして、そのような話を聞いたうえで、自分はこうしたいなとつながるようになって良い。

(委員)

(仮称)まつど市民大学の規模について、大きければ市民大学の趣旨と合わないいわゆる「ぶれた人」たちも入ってきてしまう。少数精鋭でいくのか、もう少し入口をゆるくしていくのか、どちらに焦点を合わせるのかが、今後大事な論点になる。

(委員)

「ぶれた人」も含めて、幅広く受け入れてほしい。今まで活動に関わったことがない方でも今後、担い手になると思うし、若い人もきっかけさえあれば、関わる可能性もあると思う。間口は広げてほしい。

(座長)

ターゲットを絞るより、広げて幅広くした方がよいという考え方もある。(仮称)まつど市民大学で、実践指向により、レベルアップを図ることも出来る。

(委員)

どこに成果を置くのかによって、ターゲットも違ってくる。受講生を100人集めることか、それとも50人であっても、実践につながる人が出てくることか、どこに成果を置くのかを定めておく必要がある。また、どのようなプロセスでどういう成果を上げていくのかが、重要である。

(座長)

ストーリー性が大事である。受講生が、それぞれの入口から入っても、それぞれが市民大学のストーリーに乗って、卒業後、実践につなげていく。他市の市民大学などで、定員割れしているのは、単に学ぶだけで終わってしまっているからであって、参加すればこうした人と出会える、こうした活動現場に入っていけるというようなストーリーができればもっと人は集まる。

(委員)

町会・自治会の活動を知るには、実際に参加する必要があるが、なかなかそのような場はない。市民の小さな声をどう吸い上げるかが、町会・自治会の体制には必要である。シニア世代にも活動に参加してもらうためには、あまり学ぶことに時間を割きすぎると、体力的にも、実際に活動する時間がなくなってしまう。また、市民大学を説明するときには、「共助」の部分を含めてみんなで作り上げましょうというような適切な言葉を使うとよい。

6 その他

第2回（仮称）まつど市民大学設立準備懇談会を平成28年8月23日10時から開催することとなった。